様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００４７０

研究課題名（和文）優生学的近代と貧民窟ルポ――人間の自然性と階級をめぐるエクリチュールの国際的研究

研究課題名（英文）Eugenic Modernity and Urban Slum Reportage: A Transnational Study on the Intersection of Human Nature and Class

研究代表者
辻　吉祥（TSUJI, Yoshihiro）

青山学院大学・コミュニティ人間科学部・准教授

研究者番号：５０４０９５８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英国・日本の劣位に置かれた人間に関する記録文学・ルポルタージュが再審に付され、そこに現出している貧困の歴史的にして現在的な諸問題が、国際的な視野と文献の下に考究されている。三年間を通じ、英・日のジャーナリストが残した都市の貧民窟の記録について手広く調査、地道な解読の作業をおこない、貧困という階級（概念）の内実を、歴史過程に即してのみならず疫病対策／公衆衛生を含む生物への環境条件という視座からも、検分することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の歴史的な西欧資本制への追随のありようは、その放恣を下支えした困窮階級の実態分析においても不十分であり続けている。この度の研究は、従来の階級分析、とりわけスラム住人の生活様態の解析に欠落していた同時代の疫病の度重なる猖獗、公衆衛生的隔離または優生学的分断の要因を（英国ルポとの比較考量から）組み入れたことによって、連帯もしくは団結へと成就されにくい集合性のあり方への深い理解とあらたな克服の方途を示唆しえた点に歴史的また今日的意義があると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study re-evaluates documentary literature and reportage concerning marginalized individuals in the UK and Japan from the 19th century onward. It aims to explore the deep-seated historical and contemporary social issues of poverty highlighted in these documents, drawing insights from empirical and interdisciplinary primary sources.
Through a rigorous three-year investigation and meticulous analysis of records documenting urban slums by British and Japanese journalists, this research illuminates societal ignorance towards the systemic nature of poverty, examining both historical contexts and the impact of environmental factors on human biology, such as epidemic prevention and public health.

研究分野：近代日本文学　優生思想

キーワード：優生学　疫病　ルポルタージュ　貧民窟　英日比較

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

くだんの優生思想が――一つの独立した思想潮流であることとは別に、機能としては――いわゆる上部構造イデオロギーとして個々の意識に日々働きかけるものでもあって、並行して存続してきた資本制経済がつねに行使する労働者全般にわたる漸層的棄民扱いに対する反発を、理のないものとして躱し、憤懣と痛苦のエネルギーを連帯のほうではなく、むしろ個体としての直のつぶし合いのほうに発揮(支配構造を見抜くよりは実感に容易な競争心をもって)させつつ、かつその漸層的敗北に対する“自己納得”に極めて有効に寄与するもの、というおそらく現象的には正しい説明は、全状況的にはそのような様態であるとしても、しかし問題は、その活用のされ方が、生物学的に(説明体系としても)自律性を持っており（理論的欠陥は無論多いのであるが)、社会的な闘争と人間的成長という人間が通過する人生の種々の場面に対する“近似値的”な説明、すなわちそれに差し替えられた競争と展開（ダーウィン、ヘーゲル）という説明を与えて、時代に生きるひとりびとりを、（人類史上の）全体なるものに寄与する個体として、つまり「致し方のない」「必然的に生じる、避け難い」一定常数の犠牲者として妥当なものだと読み替え可能とさせる、その置換の言説装置として力能がきわめて高いということへの質的規定なのである。

さらに（再度）しかし、労働者が何であるかをとらえる、あるいは労働者以前とされる頽落者（事実はそうではないが）たちをとらえるジャーナリスト、ルポライターたちの筆致は、とりわけこの日本的思想環境において、ややもすると個別現象的把握に終始し、深層構造をとらえるような、すなわち、たとえば表現型に惑うことのない遺伝学や資本論の思想のような、個々の現象を貫いて構造に至るディアレクティーク、もしくは本質的機構にまで測鉛をおろし分析し解明するという思考様式に至らず、松原岩五郎は、ちいさなヘンリー・メイヒュー的に（アンダークラスの総覧、博物誌的)、横山源之助もまた、現象的把握の形態的陳列、もしくは初歩的な統計的整理の段階と見紛われかねないような、これまでの歴史的理解の状況的前提、が見られたのであった。

２．研究の目的

資本制に本質的でないイデオロギーが、その保全と成員の応諾に偶々適合的であるということと、その成員の生活の困窮をふたたびその記録の側から一覧表的に描写、自然的生態化してしまいかねないという困難は、貧民窟の記録の評価と歴史的位置づけを不安定なものとしており、それらの思想的コンテクストを補った歴史的理解と再定位は必須の要請であった。それを一例によって説くならば、従来、日本の草創期の貧民窟ルポに影響を与えた重要な淵源として、チャールズ・ブース、ウィリアム・ブースらの諸本が影響を与えた旨のみ指摘されているが、むろん英国では性質の異なる調査記録として分類されている。その調査の手法、政治性、宗教性、そこから引き出される様々な救貧的対処など、内容上の違いがきちんと理解されていないために、多種あるルポの詳細な日本語圏への転位関係については、従来分析がない。どころか安易なタイトルのみの符合――『最暗黒の東京』は『最暗黒の英国』の影響といった低水準に留まっている。少なくともわたしの英国同時代言説の事前調査では、“darkest”の用語は、すでに 1880 年代より広くロンドンをめぐって人口に膾炙しており、限られた刊本での特殊な用語などではない。新聞、雑誌、国会記録という媒体、さらに広く社会的言説を踏まえずに、刊本のみを中心とした比較対照研究が起こしがちな基本的な誤認である。依然ここに前田愛以来の諸研究がとどまっているのは遺憾であり、明確に、刷新の必要があった。加えてそれらを囲繞したアンドリュー・マーンズのパンフレットはじめ、ベストセラーも多かった英国スラム小説を解読し、歴史的理解のヴォリュームを厚く担保する必要性がみられた。

３．研究の方法

方法的な問題としては、むしろ依然色濃い賃労働者中心のはたらきの捉え方、整序の仕方（それは近代的な革命に賭する諸規定でもあるが）をいったん留保し、そこに描かれる少なくとも数十種にのぼる職業、生業のあり方をあらかじめ望ましく予想された意味に志向して取捨選択するのではなく、そこにあった生活上の困窮、すなわち貧困のあり方を、歴史の側に解き放ち直す道筋をいかにとれるのかということになる。社会革命に直接的に寄与すると想定・規定された主体のみに特化して“はたらき”の内実を見るのではなく、困窮を出来させた構造をその固有の論理とともにそれぞれに見立ててゆくことのほうが、当然かも知れないが、困窮のダイヴァーシティはよく保存され、歴史の再理論化に期待できるところが大きい。資料が語るように、そこにはプロレタリアートの先駆け形態のみが、ひとびとの困難としてあったわけではなく、直接的な

生産性に携わらない地力回復的な労働に携わる環境プロレタリアートとでも言うべき、生産性の外部に生きる労働者たちの姿も特にこの時期の日本ではたいへん多く各地で確認される。それらの人々を視野に収める思想を理論的に用意するには、環境維持労働とでもいうべきはたらきが経済化されていなければならないが、依然としてそれは望むべくもなく、またそれゆえに社会的包摂として、彼らはたらく者たちの生存状況が新しく比定されねばならないと考えられた。結果的にはむろん、すでに同時代にH・マロンを含む東アジア調査団の報告によってドイツ圏には知られていたことであるが、日本の地力をめぐる物質代謝の仕組みにはこれらの人々の大きく重要な関与があり、資本による問題の深刻化と物質代謝の破綻を堰き止めている側面が存在した。しかし一方で同時に直接的生産性に携わらない“自然”側のにんげんひとりびとりは、その収入という形での評価体系の欠如によって、当然のように食料に事欠き、貧栄養状態によって、また住環境の非清潔性によって、疫病の手にとらえられやすく、猶予の少ない生の時間を容易に強いられていたことが観察される。こうした結果的な塊としての層を、重ねて統治側は（にんげんではなく）塊としてしかみなさないわけであるが、その視座自体によって、メトロポリスの貧民窟は、集団的に黒く塗りつぶされ、その認識の操作によって優生学的な階層地図がつくられる。貧困の地図＝疫病汚染の地図＝優勝劣敗の物語の事実的正当性を担保するエビデンスとしての地図、の同語反復的認識の循環が陥穽として成立し、流通するのである。むろん研究はこれらの固着された結果論をその成立過程に差し戻し、自明性の無根拠性に立ち返らせる、という手法を丹念にとることになった。

４．研究成果

これらの自明化して流通し、通弊となった不可視化の仕組み、資本制の人間壊乱の漸進的横滑りを認識の構造もろとも明察できるようにすることが、重要な眼目のひとつとなった。例えば早い時期に行なわれた学会発表「滅殺の時――疫病の記録と未来」（日本社会文学会春季大会）では、「貧困」の figure が、英国においては 19 世紀後半の度重なる疫病の流行、および農・工業における生産過程の資本制化を地（ground）として結構されることを確認しつつ、一方で明治二〇年前後における桜田文吾のルポルタージュの様態をも検分するものであった。衛生の格子が、他者性に対する生物学的アラートを敏感に統御する環境において、相互のディタッチメントがそのまま階級の構成に繰り込まれているありかたは従来の(団結的と思われた)階級性の本質を、掘り崩しつつまた奇妙に維持もしており、そこでの互いに他者をこそ守ろうとする新しい -ship の観念（それが社会の紐帯と歴史をどう構築できるのか）の提案も含めて、新機軸の問題構制を提示しえたと考えている。

この数年はまさに課題と相即した Covid19 の疫病蔓延下であったためにそのリアリティがいつにないものであり、また実際いかんともしがたい制約をおおいに受けたが、これらの構造は、近代の社会的問題のコアとして一貫して継続し、され続けているものであり、それゆえ誤った認識を繰り返せば、ますます解決を遠のかせる事態に立ち至るともいえる。制限下で収集された資料群を今後もさらに深く解析、追究していく中で、継続してその社会的な解決の道筋に至ることができるよう、さらに深化させてゆきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 辻 吉祥
２．発表標題 滅殺の時――疫病の記録と未来
３．学会等名 日本社会文学会 2021年度春季大会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 （代表）中島国彦、辻 吉祥	４．発行年 2024年
２．出版社 公益財団法人日本近代文学館 The Museum of Modern Japanese Literature	５．総ページ数 -
３．書名 『日本近代文学大事典』増補改訂デジタル版 人名編「角幡唯介・かくはたゆうすけ」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関